



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

米国におけるギフテッド教育に関する特性把握と対応をめぐる議論の特徴

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 拓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166807

米国におけるギフテッド教育に関する特性把握と 対応をめぐる議論の特徴

村 山 拓*

特別ニーズ教育分野

(2020年9月29日受理)

1. はじめに

学校教育において、支援を要する子どもがいわゆる障害児や慢性疾患児に限定されないということは、既には共有されつつあると考えられる。もちろん、その中には多様なバックグラウンドを持つ子どもが含まれる。一例を挙げると、わが国の小学校学習指導要領では、「特別な配慮を必要とする児童への配慮」として、「障害のある児童」に加えて、「海外から帰国した児童や外国人の児童」、「不登校児童」などが挙げられている¹⁾。個々の教育的ニーズに対応する学習内容の開発は、引き続き重要な課題と考えられる。

本稿では、その中でギフテッド (the giftedあるいはthe talented, ギフティッドとする表記もあるが、本稿ではギフテッドとする) の子どもについての教育実践の課題を、米国の議論を参照することによって探ることを目的とする。ギフテッド教育は、わが国では、杉山・小倉・岡 (2009) による紹介をはじめとして、散発的に取り上げられてはいるものの、その意義の割に十分な議論や実践の展開がなされているとはいえない²⁾。しかし近年、角谷・榊原らによる翻訳 (2019) によるギフテッド診断の問題点の指摘や、関内 (2020) による米国のギフテッド教育の展開の紹介など、ギフテッド教育への注目が継続していることにも注意する必要がある^{3), 4)}。また、後述するようないわゆる2E (twice exceptional) の問題も含めて考慮したときに、ギフテッド教育の特徴や理論的、実践的課題を取り上げることには一定の意義があると考えられる。そこで、本稿では、米国におけるギフテッドの特徴や議論を検討することで、教育におけるダイバーシティを検

討する材料を得ることとしたい。

2. ギフテッド児の教育上の特性

2. 1 ギフテッドの基本的な特徴

まず、ギフテッド、あるいはギフテッドネスがどのように定義されているかを簡単に確認したい。直訳すれば、能力に恵まれた人、あるいは才能という恩恵を持っている人、与えられた人といった意味でもともと使用されてきた語である。筆者の調べた限りではあるが、例えば特異的な子どもの教育のプログラムの各州の取り組みをレポートした報告資料 (1940年) の中にも、特別なプログラムが必要な子どもとしてギフテッドの子どもについての言及がなされている⁵⁾。また、米国でもきわめて有力な専門家団体である障害児委員会 (Council of Exceptional Children) でも、「精神的に進んだ子 (mentally advanced children)」として、学校での取り組みの報告が1962年になされている⁶⁾ (筆者注、管見の限りでは1940年代から1960年代ころまでのギフテッド教育、あるいはそれに類する子どもの教育に関するレポートについて、精神遅滞、現在でいう知的障害の専門家の名前を多く見つけることができることも興味深い。別稿にて検討したいと考えている)。

しかし、それらの資料類では、ギフテッドについての説明はそれぞれ異なっており、定義や判定基準は少しずつ異なっている。実際には、国や州の境を超えたときにギフテッド児がギフテッド児でなくなるといった問題というよりは、学校教育の中でギフテッドとして特別な支援を要するかどうか、ニーズに応じた教育を制度的に提供するかを判定する際に、その子どもが

* 東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1)

ギフテッドとみなされるかの判断基準、判定基準が異なっているということになる。そのため、その子ども自身がギフテッドかどうかということを、ある意味本質的に特定するというよりは、特別な支援の対象になるかどうかを判断する時にはやはり制度的な手続きや基準に則って行われる必要があるという意味において、国や州による定義の違いが焦点となることがある。一般的には、知能指数 (IQ) の分布がベルカーブ状になるという想定のもとで、IQ130以上がギフテッド (gifted) で約2%, IQ145以上が著しいギフテッド (profoundly gifted) で約0.1%の分布とされている。つまりこの子どもたちがギフテッド教育の対象として想定されるわけであるが、IQの分布がベルカーブで対称形をなすとした場合に、多くの国や州などで、IQが70より低い子どもが知的障害として特別な支援の対象になっているが、IQが70より低い子どもが特別な支援を必要とされ、特別なカリキュラムで学習することが有効であると考えられていることとパラレルに考えることができる。現在広く展開されている公教育に即して考えると、いわゆる通常のカリキュラムとは異なる学習が適切であるとされるカリキュラムやプログラムが想定されるのと同様に、IQが130より高いとされる子どもについても、同様に、何らかの特別な手立てが必要になるとする考えに基づいているといえる。そのような意味で、ギフテッドの子どもにも何らかの特別なニーズがある、あるいは特別なニーズに応じた教育が必要になるという考えが成り立つことになる。

ギフテッドネスについては複数の定義が示されているが、ここでは、いわゆる「連邦定義」と呼ばれる、マーランド・レポート (通称) に注目する⁷⁾。マーランド・レポートは、連邦労働福祉局の下位委員会で作成されたもので、早期に明確なオフィシャルの定義を示したものとされている。マーランド・レポートでは、ギフテッドの特徴として、主に4点が挙げられており、とびぬけて高い才能ゆえに高い実績を上げることが可能であること、標準的に提供されるのとは異なる教育プログラムが必要であること、潜在的な可能性のある子どもを含むこと、知的能力、特定の学問領域・創造的思考、リーダーシップ、ビジュアル・アーツ、精神運動機能などにおいて才能を発揮すること、である。同レポートでは、知能検査であったり、教室での観察などで見出せない子どもを含んで考えており、教師や親には見つからない子どもも含まれるかもしれないという視点で、子どもの能力、才能を見出すことが示されている。後述するが、今日活用され

ているギフテッドのスケールにも、その説明がおおむね反映されていると考えられる。

また、今日、ギフテッド児の教育について、活発な活動を展開している団体として、全米ギフテッド協会 (National Association for Gifted Children) があるが、それらの基本的なギフテッドの定義はマーランド・レポートに即している⁸⁾。その中では、ギフテッドの定義のみならず、ギフテッドの子どもの生きづらさに焦点を当て議論がなされたり、ギフテッドの子どもがよりフィットするような学校教育を受けられるような議論が展開されている。ここでは、その議論の特徴を四点挙げる。一点目が、マジョリティの子どもよりも生きづらい場合があるという指摘である。能力が高いこと、才能があること、能力に凸凹がある場合も含めて、何らかの本人の特質によって生きづらさを抱えている場合があるということが示されている。二点目として、適した環境が与えられないことによる不適応を起こしている場合があるということが示されている。この場合の適した環境を、“right-fit education” という表現を用いて、ギフテッドの子どもが、学校教育に適切にフィットできていないということを指摘する。三点目として、教師に対して、ギフテッドの子どものユニークな特徴を尊重してニーズに添えて欲しいという期待が示されている。四点目は、ギフテッドを定義づける上での制約として、知能検査や学業達成、学校での成績と同義ではかられやすいという問題が指摘されている。例えば学校に入る前の子どもについて、その特徴を見出すことが難しかったり、なかなかギフテッドの検査に推薦されるようなことが少ないといったことが示されている⁹⁾。これは、ギフテッドの検査を受ける上で、学校長の推薦を要するケースがあることを想定した指摘である。学校の中で、ギフテッドの特性を見出されにくい子どもがいることは、いわゆるアンダーアチーバーの問題を考える上でも示唆的である。またWebbら (2016) では、誤判定 (misdiagnosis) のケースもあることが指摘されている¹⁰⁾。

2. 2 ギフテッド児の行動面、情緒面の特性

ギフテッドの子どもは、その特性ゆえに、その能力や才能、特に学業達成や知的成熟の面に焦点が当たりやすいが、行動特性についても注目する必要がある。ウェブらは、その行動特性をリスト化しているが、筆者なりに代表的と考えられるものを取り上げてみると、年齢の割に語彙が豊富であったり、文章構造が複雑であること、激しさと繊細さをあわせ持つなど、感情の起伏が激しかったり、センシティブ、デリケート

表1 ギフテッド児の「表裏一体の問題」(Clark 2012, Webb et al. 2007 をもとに作成。¹⁴⁾, ¹⁵⁾)

長所	「アキレスの踵」(ウェブほか2019)
情報を素早く理解する。	他者の理解の遅さに耐えられない。
探究心が強い。	ばつの悪い質問をする。
やると決めたらやり抜く。	人に指図されることに断固として抵抗する。
秩序や体系を追い求める。	仕切り屋のように見えたり支配的に見えたりする。
創造的で発明的である。	他の人々の計画を乱すことがある。
強烈な集中力がある。	遮られることを極度に嫌がる。頑固に見える。
エネルギーが溢れている。	活動的でない状態にフラストレーションを感じる。
興味関心が広く多様である。	散漫に見える。
並外れたユーモアのセンスがある。	ユーモアが授業や仕事の邪魔になることがある。
鋭い観察眼をもつ。	矛盾が見え失望してしまうことがある。

だったりすること、普通とは異なる方法でものごとを試したがるといこと、クラスの文化からは不適応を起こしやすいことなどが挙げられている¹¹⁾。さらに、想像上の友人がたくさんいるとされる。ここでいう想像上の友人というのは、バーチャル空間の友人というよりは、相互には友人だと認識されていない場合を主には指している。さらに、複雑なゲームを考案するなど、仕切りたがる面などが指摘されている¹²⁾。

次に、社会面、情緒面での特性について、Webbらをもとにここで四点を挙げる¹³⁾。一点目は自分の能力を酷使すること、それによって、疲れやすかったり張り切りすぎたりするようなことが挙げられる。二点目として、理解を徹底的に求める、あるいは物事のルール、秩序や、学問的なものも含めて一貫性を求めようとするということである。これは学問的な探究の意味で、教科学習の例でポジティブに作用することも少なくないが、ルールの狭間が認められにくかったり、許容できなかったりすることが指摘されている。三点目は、社会問題や道德問題への関心の高さが、理想主義と繊細さとして現れるということである。正義感が極端に強かったり、正義感が強いゆえに他人の行動が許容できず、そのことが理由でトラブルになるということも紹介されている。四点目が、身体面、情緒面、知的面の発達の不均衡さ、アンバランスさである。ギフテッドとして能力の高さを発揮しているものの、年齢相応には精神的には成熟していないといったケースが示されている。

先行研究では、ギフテッド児に表裏一体の問題があると指摘されている(表1)。例えば、情報を素早く理解するということは、ギフテッド児の長所としてみなされるが、他者、例えばクラスの友達の理解の遅さに耐えられない場面があることや、最後までやり抜くことができる一方で、その指図されることに対する抵

抗が強いことや、集中して物事に取り組むことを、遮られることについて極端に嫌悪する、興味関心が広い分、散漫に見えてしまうといったことが挙げられる。また、鋭い観察眼を持つて分、矛盾が見えて失望したりすることで、メンタルの問題を誘発しやすいことも指摘されている。

また、ADHDの併発例、あるいは類似例が多いということについても指摘がなされている。またその一方で、ADHD そのものが特にメンタルヘルス上の問題を抱えやすいこと、特に米国では、ADHD傾向で日本でいう児童精神科を受診するケースが非常に多いことが背景としてあることから、ギフテッドの子どもとの併発例についての報告がなされている。特にギフテッド児の場合には、自分のできない、苦手な内容の活動であっても、その持っている能力で補う傾向が強いことから、ADHDがさらに見過ごされやすいことが指摘されている。さらに、怒りの感情だったりフラストレーションの問題、また苦痛が言語化できない、あるいは言語化されないまま本人のフラストレーションが蓄積されていることも想定されている¹⁵⁾。ウェブら(邦訳2019)では、学校の中で評価されるギフテッド児と評価されないギフテッド児がいると指摘されている¹⁶⁾。具体的には、クラスの中で教師の指示は、その教師があらかじめ定めたルールに調和することに長けているか、といった評価基準が存在することが示されている。ここでは学校の中で周りとうまく折り合いをつけることができる子どもが評価されやすいという学校文化が反映している。そのことを苦手とするギフテッド児には、学校の環境の居心地の悪さやいわゆる生きづらさにつながっているという指摘である。能力を伸ばすような場やカリキュラムを用意することとあわせて、自尊感情を下げない、あるいは自尊感情をあ

る程度、適度に維持しつつ、その能力の特性に応じた活動や働きかけが必要になってくるといえる。

3. 学校における対応について

3. 1 学校におけるギフテッドの適応

本章では、学校としてどのようなことを検討する必要があるのかを整理したい。前章で、学校文化に調和できるかどうかの一つの焦点になっていることを、ウェブら（邦訳2019）に依拠して説明したが、ギフテッド児の中には、特定の状況でしか才能を見せないケースや、突出した状況を嫌うので才能を隠す、実際には高いパフォーマンスを発揮することができるものの、それをオープンにしない、披露しないというケースがあるという¹⁷⁾。そのことには留意する必要がある。前述の評価場面と関連して、ギフテッド児の中でも、成績が優秀でかつ集団の中でリーダーシップがとれるような子どもは評価されやすく、成績が優秀でもリーダーシップを取らないような子どもは評価されなかったり、場合によってはギフテッドの検査を受けてみるよう、学校長から推薦されることも少ないということが指摘されている。もちろんギフテッドとかどうかを判定する際に、様々な発達検査、多くの場合は複数の発達検査を組み合わせた判定が実施されているが、そこでのディスクレパンシーが大きい場合などは、複数の検査、タイプの異なる検査を実施して、平均値を取ることもあるとされる¹⁸⁾。同書では、検査結果にギャップがある場合に、ギフテッドという判定を避け、能力が高いけれども凸凹のある、と判定されるケースが多いという指摘もなされている。

また、いわゆる2Eの問題にも留意する必要がある。例えばギフテッドと見込まれるが、かつディスカリキュリアであるといったケースである。言語については非常に高い能力を示すものの、計算能力については必ずしもそうではない、むしろ不得手であるといったケースが考えられる。米国で顕著な例として指摘できるのは、英語（米語）を母語としない子どもで、学校では授業や教室での活動に参加することに制約がある場合などである。さらに、マイノリティとされる子ども、経済的な問題、あるいは家庭の教育観や教育風土のようなものによる影響を考慮する必要がある。家庭の中での会話や読書環境、あるいは言語の使用環境などに応じて、ギフテッドであることが見出されにくいことが示されている。ウェブら（邦訳2019）では、約半数が見落とされているのではないかという試算もなされている¹⁹⁾。このことは、前掲のマーランド・レ

ポート以降さまざまな領域でギフテッドへの対応が検討されてきたものの、どうしても学業成績や知能検査などがベースになりやすい、あるいはそれとの関連が重視されやすいことから、アート、リーダーシップなどについて、学校ではその子どもの特性が見出されにくいということになる。多重知能理論などに例を見出すことのできるように、その特定の領域での能力と、特定の領域での苦手さは、一人の子どもの中に混在、併存しうるため、特にギフテッド児の場合、そのことへの対応がどうしても後手に回りやすい理由として考えられる²⁰⁾。

3. 2 ギフテッドの評価スケール

ギフテッドの評価、判定には複数の検査が組み合わされることが多いとされる。知能検査はほぼ間違いなく含まれるが、それと併用するものとして、比較的よく用いられるのが、ギフテッド評価スケールである²¹⁾。ここでは、そのスケールの14の観点と、各観点の下位項目例を挙げる。

評価スケールの特徴を概観すると、学習能力に焦点が当たることがやはり多く、当該児童の年齢よりも高い語彙であったり、文、文法、複雑な文でも扱えるかなどが観点となっている。また責任感のようなものに注目し、その年齢の集団内で、特に自信を持っていたり、しきり役、まとめ役となるような傾向にも注意が払われる。コミュニケーションについては、このスケールではコミュニケーションの的確さと表現力を分けて評価が行われる。的確さについては、その焦点、話題の絞り方であったり、明確な修正のしやすさなどがポイントになっている。表現については、表現のツールが豊かであるかなどがポイントになっている。いわゆるアートについてもそれぞれの項目や、数学やリーディングのような項目が挙げられている。このようなものを使いながらその子どもの特性を見出すことが期待されているといえる。

4. おわりに：ギフテッド教育の課題

最後に、今後展開するであろうギフテッド教育の課題について展望する。第一に、多角的な基準やスケールの開発が必要になる。現行では、複数の発達検査が組み合わされて用いられているが、評価スケールのようなものの精緻化であったり、評価スケールを受ける以前の、学校でのその子どもの特性把握の方法論的精緻化が必要である。冒頭に指摘したように、その子どもがギフテッドか否か自体が問題というよりは、教育

表2 ギフテッド評価スケールの項目例²¹⁾

スケール	観点例
学習能力の高さ	語彙が年齢よりも高度で豊富。因果関係の洞察が早い。
創造性	独創的、機転の利く反応。人と違うことをおそれない。
意欲	長時間の集中。興味のあることには外発的動機付けをあまり必要としない。
リーダーシップ	責任感。同年齢の仲間の中で自信を持っている。まとめ役となる傾向。
計画性	課題に必要なものの見極め。仕事を割り振る方法。
コミュニケーション（の的確さ）	要点をしばって話したり書いたりする。明確に修正、編集できる。
コミュニケーション（表現）	表現豊かに声を使い、意図するところを伝えたり強調できる。
演劇	ジェスチャーや身体表現。聞いている人の感情を呼び覚ます。
音楽	音のピッチ、音色、音量、響きの長さなど、要素の違いを認識できる。
アート	考えを視覚的に、多様な要素を用いて表現する。
数学	数理パズルやゲーム、推論問題が好き。視覚的、言語的に数学概念を説明できる。
リーディング	長時間夢中で読む。難易度の高い読みものに挑戦する。
テクノロジー	テクノロジースキルを使える。スキルを磨く意欲。
科学	科学的事象やものの性質について知りたがる。データの持つ意味を理解し、明確に伝えられる。

的ニーズのある子どもを支援につなげるため、あるいは適切なフィットをうながすための枠組みと手続きの向上が必要と考えられる。二点目が、検査のスコアと特性が噛み合わないケースが、今後さらに増加することが予想される。再度2Eのケースを引き合いに出すが、苦手だからそこに焦点を当てるというオーソドックスな支援の方策だけではなく、得意なことを伸ばすことにも焦点を当てる必要がある。例えば支援が必要な子どもの教育内容、特に重点的な学習課題を検討する際に、苦手さを少しでも埋める方向への働きかけと、得意なところを伸ばす働きかけとがある。特に米国のギフテッド教育の特徴を見る限りでは、後者の支援や指導に力点が置かれており、そのことをそのまま踏襲するかはともかく、参考にすることは有効ではないかと考えられる。例えば、障害のある子どもが就労を目指す場合には、苦手なことで就職するというよりは、得意なこと、そこで世の中でも、ある程度それで就労できるようなものを使って社会参加していくことを考えると、やはりギフテッドであれ、そうでない場合であれ、得意なことを伸ばすという発想は、支援を考える時には意識しておく必要がある。三点目として、進路、あるいは多様な学びの場を確保することが改めて求められているといえる。米国では冒頭で例を示した通り、飛び級のような、年齢や学年、特に学年という仕組みにとらわれないケースがある。この学年という仕組みも検討する必要があるかもしれない。四点目が教師の観察眼についてである。ギフテッド児を

見つけること自体が目的ではないとはいえ、その子どもの特性を伸ばすことやそれに対する教師への期待は、NAGCのような団体を中心に根強くある。特別なニーズを過不足なく見出す教師の専門性の一つとして検討材料になるのではないかと考えられる。

引用文献

- 1) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編，東京（東洋館出版），2018年
- 2) 杉山登志郎・小倉正義・岡南，ギフテッド 天才の育て方，東京（学習研究社），2009年
- 3) ウェブ，T. B.，アメンド，E.R.，ベルジャン，P.，ウェブ，N.E.，クズジャナキス，M.，オレンチャク，F.R.，ゴース，J.（著），角谷詩織・榊原洋一（監訳），ギフティッド その誤謬と重複診断 心理・医療・教育の現場から，京都（北大路書房），2019年
- 4) 関内偉一郎，アメリカ合衆国における才能教育の現代的変容—ギフテッドをめぐるパラダイムシフトの行方—，名古屋（三恵社），2020年
- 5) Martens, E. H. : State Supervisory Programs for the Exceptional Children. Bulletin, No6, Monograph No.10, Washington D.C. (U.S.Office of Education, Federal Security Agency) , 1940年
- 6) Reynolds, Maynard, C. : Early School Admission for Mentally Advanced Children: A Review of Research and Practice, Arlington(Council for Exceptional Children) , 1962年

- 7) United States Senate, Subcommittee on Education of the Committee on Labor and Public Welfare: Education of the Gifted and Talented: Report to the Congress of the United States by the U. S. Commissioner of Education and Background Papers Submitted to the U. S. Office of Education, Washington D. C. (U. S. Government Printing Office) , 1972年
- 8) National Association for Gifted Children: A Definition of Giftedness that Guides Best Practice: Position Statement, <https://www.nagc.org/sites/default/files/Position%20Statement/Definition%20of%20Giftedness%20%282019%29.pdf> (last retrieved 3rd, Aug. 2020)
- 9) ウェブら (邦訳2019) : 前掲書
- 10) Webb, J. T., Amend, E. R., Beljan, P., Webb, N.E., Kuzujanakis, M., Olenshak, F. R., and Goerss, J. : Misdiagnosis and Dual Diagnoses of Gifted Children and Adults: ADHD, Bipolar, OCD, Asperger's, Depression, and Other Disorders (2nd edition), Goshen(Great Potential Pr Inc), 2016年。 邦 訳 (2019) を参考にしつつ, 一部改訳した。
- 11) ウェブら (邦訳2019) : 前掲書
- 12) 同上
- 13) 同上
- 14) Clark, B. : Growing the Gifted: Developing the Potential of Children on Home and School (8th edition), New York(Pearson) , 2012年
- 15) Webb, J. T., Gore, J. L., Amend, E. R., DeVries, A. R. : A Parent's Guide to Gifted Children, Goshen(Great Potential Pr Inc), 2007年
- 16) ウェブら (邦訳2019) : 前掲書
- 17) 同上
- 18) 同上
- 19) 同上
- 20) ガードナー, H. (松村暢隆訳) : MI : 個性を生かす多重知能の理論, 東京 (新曜社), 2001年
- 21) McCarney, S. B. and Arthaud, T. J. : Gifted Evaluation Scale Third Edition, Columbia, MO (Hawthoren Educational Services Inc.), 2009年

米国におけるギフテッド教育に関する特性把握と 対応をめぐる議論の特徴

Understanding the Characters of the Students and the Discourse on the Education for the Gifted Students in the United States

村 山 拓*

MURAYAMA Taku

特別ニーズ教育分野

Abstract

In this paper, the practical agenda of education for the gifted are surveyed through the analysis and reference on the discourse for the gifted education in the United States. First, the definition are examined through the “Marland Report” (1972). Second, the gifted students’ difficulties in adjusting to the schooling are surveyed on the document by the National Association for Gifted Children. Third, the features and characteristics of the gifted students’ behavior and emotion are overviewed by the discourse analysis on the gifted education. Finally, the vision and agenda for the schooling for the development of the education for the gifted, including the accommodation and modification for the twice exceptional children, the adjustment and maladjustment to the schooling of the gifted, and the development for the diverse rating scales for the gifted children.

Keywords: the United States, the Gifted, Behavior, Emotion

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿では、その中でギフテッド (the giftedあるいはthe talented) の子どもについての教育実践の課題を、米国の議論を参照することによって探ることを目的とする。マーランド・レポート (1972) などをもとに、米国におけるギフテッドネスの基本的な定義を確認し、次に全米ギフテッド協会による定義とギフテッドの学校への適応しづらさなどを整理した。さらに、米国での議論をもとに、ギフテッド児の行動特性や情緒面の課題について概観した。そして、2E (twice exceptional) 児への対応や、ギフテッド児の学校への適応／不適応や、その特性を見出す上での多面的な評価スケールの開発など、今後の学校教育の課題を展望した。

キーワード: 米国, ギフテッド, 行動, 情緒

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)